

## コラム6 「天災日記」に見る流言蜚語と戒厳令

コラム4「共助が支えた救済」で述べたように、鹿島龍蔵は、現在の鹿島建設の前身である鹿島組の組長の弟で、田端の自宅に200人もの避難者を受け入れた様子を「天災日記」として残している（武村雅之, 2008）。それを読むと、龍蔵が地震直後に怖れたのは、食料不足が起こり世情不安定になるのではないかということであった。米の価格高騰で全国的に米問屋などの襲撃が起こった1918（大正7）年の米騒動が記憶にあったからであろう。確かに一部で食料不足は発生したが、地方からの緊急の食料供給も順調で、龍蔵の心配は杞憂に終わり、5日に自宅近くの澤田米店で玄米を売り出しているのを見て、食糧問題の不安は一掃したと書かれている。

「天災日記」によれば、むしろ人々を動揺させたのは、食料不足ではなく流言蜚語であったようだ。地震発生当日の9月1日の夜に、火災の最中に聞こえた爆発音が、翌朝、朝鮮人の爆弾によるとの風説が伝わってきたという。同じような話は、亀戸の松本ノブも聞いているし、本郷三丁目でもあったと記されている（武村雅之, 2005；鈴木淳, 2004）。

2日の夕刻に、龍蔵の妹の木丸の嫁ぎ先で田端在住の野邊地慶三宅を見舞うと、品行の悪い朝鮮人がこの機に乗じて暴動を起こしている、火事がこのように大きくなったのもそのため、今、現に近くの動坂で焼き討ちを行いつつあるとの噂を聞く。龍蔵がそんなことはあり得ないとの話をして家に帰ってくると、上野方面の火災が勢いを増して焼け灰が降ってきた。龍蔵宅の避難民たちが、動坂に火が起こってこの方面に燃えてくるという流言に惑わされて騒ぎ出す。ちょうどそこへ、騎兵一大隊が門前の道路を蹄鉄の音高く通過する。今にも戦争が始まりそうな雰囲気、たまらず群集の騒ぎが頂点に達した。龍蔵はこのままでは一大事になるというので、大声で制しようとするが効果がなく、一度屋根に上がって火事を見た上で、下りて群集に半ば演説的に次のように話しをした。

「昨夜の火の様子と比較して、今夜のは話にならぬ程か小且つ弱なる事、地震のゆりかえしは心配無い事、不逞鮮人の暴挙等は歯牙にかくるに足らざる事、其の終りに更に語をついで曰く、僕は此の家の主人なり、諸氏去らんと欲するならば去れ。素より僕の関知せざる処なり。但し僕自身は、此の絶対安全の地を一步も離るゝ事なし。万々一、何事か起らば、其の時は僕は此の域廓内に、一家と供に死せんのみと。」

騒ぎはこれで一時収まったが、これ以後も朝鮮人暴動に関する流言蜚語はますますひどくなり、午前3時には遂に、尾久を追われた徒300人が一大集団となって来襲するというので、高臺組合の男子総出動で警鐘を乱打するまでになった。もちろん朝まで何事もなく過ぎた。3日になってもこの状況は続き、朝鮮人暴動に関する様々な流言蜚語が飛び交い、人々の不安はますます増幅させられた。

このころ、既に各地の青年団、在郷軍人会、消防組などを中心に自警団がつくられた。田端でも西臺通りではポプラ倶楽部の近くに自警団の詰所ができ、東臺通りでは、作家の芥川龍之介など若手が中心になって自警団が結成された。龍蔵は、これらの活動を良しとはしていな

かったようであるが、近所の付き合いもあり、書生を高臺組合員と一緒に外で警戒にあたらせ、また、邸内は避難者の中から男子十数名を選んで交代に警戒させた。

龍蔵宅への避難者を見ると、9月3日から4日にかけて、親戚や知人の女性を一時預かってほしいという人が何人か見られる。いずれも焼失地域の周辺部の避難先からで、恐らく物騒な空気が渦巻き、被災住民の不安を掻き立てていた結果だと思われる。その主な原因は流言蜚語であったことは疑う余地がない。流言蜚語で惨殺された朝鮮人に関しては、「天災日記」にも、9月5日に龍蔵が京橋区木挽町の本店の焼け跡に向う途中、御徒町付近の路上に不逞な朝鮮人であると言って殺害された死骸が放棄されているのを目撃したり、9月6日に今戸の建具屋が来て、朝鮮人を殺した話を自慢げに話しているのを苦々しく思ったりしたことが書かれている。

今井清一（1974）によれば、朝鮮人来襲の流言が広がると、政府は9月2日の夕刻近くに、東京市と荏原・豊多摩・北豊島・南足立・南葛飾の府下5郡に、戒厳令の一部施行を実施した。陸軍は、戒厳令が下ると、騎兵をして施行地域を駆けめぐらせ、軍隊の到着を住民に知らせたという。2日の夜に龍蔵の家の門前を通過した騎兵はこれにあたるのだろうか。この知らせが、恐怖と不安に満ちた人々に活気をよみがえらせたと同時に、流言蜚語が真実であるとの実感を人々に植え付けて、返って恐怖を増幅させたということも考えられる。戒厳令の施行区域は3日には、東京府と神奈川県全域に拡大され、関東戒厳司令部が新設された。

龍蔵が鹿島組の本店に向う途中、同行した親戚の田井榮治郎が、日本橋川に架かる鎧橋が通行止のために、上流の江戸橋か下流の湊橋が通れるかを、居合わせた2人の警官に聞こうとしたところ、田舎から連れてこられたような2人の警官が、田井が縄張りを越えたということを咎めて、「戒厳令が発せられている今日ぐずぐず言うと斬ってしまうぞ」と、穏やかでない態度を示したことが書かれている。戒厳令が、警官の態度を高圧的にし、ただでさえ気の荒んだ罹災地に、一層殺伐とした空気を漂わせたことがよくわかる。

また、帰宅の途中、永田町一丁目の陸軍参謀本部前にさしかかった。陸軍参謀本部は、現在の国会議事堂があるすぐ脇の敷地で、皇居の内堀端にあった。そこで龍蔵が見たものは、参謀本部に高々と掲げられた日章旗と、筆太に書かれた関東戒厳司令部の真新しい看板、さらには赤色帽に星章の軍人が、羽振りよさそうに、自動車、騎馬、オートバイなど並べて右往左往する姿であった。ただ、その堀端の崖の青草の上には、多くの避難民が充満していた。この光景に龍蔵は「之れこそ戦争の様相である。但し無論負け戦の光景である。」と皮肉を込めて記している。若いころに英国留学の経験をもち、自由を愛した龍蔵にとっては、大正デモクラシーの時代に逆行するような光景は、許し難かったのかもしれない。

龍蔵宅には、5日の夜から上京した越後の高田連隊のうち、歩兵の一個中隊百人が露營することになった。戒厳令が出されて以後、地方の部隊の来援が続き、その一環かと思われる。女性達はこれで安心と、宵のうちから久しぶりにゆっくりと眠るが、龍蔵は彼等の様子が気になり、何か必要なことがあるかもしれないと11時ごろまで起きていた。このように、戒厳令は、人々に安心を与えた反面、不安や恐怖を掻き立て、自警団の蛮行に代表されるような、時には血生臭い殺気を増幅させる効果もあったように思われる。